

-----  
 巻 頭 言  
 -----

## 表面科学講演大会の思い出



難 波 義 捷

第6回表面科学講演大会が昨年、12月4、5日に20近くの学会、協会の協力を得て開かれ、非常に盛会の内に終わった。しかし、この講演大会の過去を振り返ってみると種々苦勞のあとが思い出される。

例えば、講演大会の名称は第3回までが討論会で、第4回目からは講演大会に変更され、また開催日も当初は2月に行なわれていたが、3回目から12月に変更となり、会場の方も1会場から2会場になった。

このように今迄講演大会の企画は毎回大幅な変更が行なわれて来た。これは学会が過渡期であるということかも知れない。しかしそこにはいくつかの理由がある。

まず初期の頃は、本会はそれぞれの境界領域を取扱う基礎的分野であるということから、ある程度時間をかけて討論すべきであるという意見が多く、したがって名称も討論会で、1件当たり20分の時間が割当てられていた。当時は討論件数も30件程度で一応初期の目的は達成されていた。ところが、会を重ねるにしたがって、講演件数と参加者数が急増し、また内容的にも分野が拡がりすぎ、1会場では議論がまとまらなくなってきた。そこで、その都度大幅な修正を加えながら現在のような講演会形式になってきた。ここにきて講演会も一応の方向が見えてきたような気がする。

これからの課題は、本会の特長をもう少し表面に出し、境界領域を統一的に討論するような方法を見出していくと共に、討論が時間、会場の都合で充分できない場合の対策も併せて考えていく必要がある。その解決策の一つとして、今回の特集号は講演会で充分に議論できなかった部分を整理し、内容を更に充実し、これを会誌の特集号として記録に残そうというものである。

いずれにしても各分野に共通した表面、界面の興味ある問題を、多数の参加者が満足に討論できるような方法を早急に考える必要がある。

(東京農工大学)